#### 1. ddd

#### 1.1 Asymptotic Expansion of Governing Equations

$$\begin{cases} \varepsilon^{\epsilon}(x) = \frac{\mathrm{d}u^{\epsilon}(x)}{\mathrm{d}x} & \text{strain-displacement relation} \\ \sigma^{\epsilon}(x) = C^{\epsilon}(x)\varepsilon^{\epsilon}(x) & \text{constitutive equation} \\ \frac{\mathrm{d}\sigma^{\epsilon}(x)}{\mathrm{d}x} + f^{\epsilon}(x) = 0 & \text{balanced equation (Cauchy's first equation of motion)} \\ u^{\epsilon}(0) = u^{\epsilon}(L) = 0 & \text{boundary conditions} \end{cases}$$
 (1)

ここで、未知量は  $u^{\epsilon}(x)$  のみ、すなわち  $f^{\epsilon}(x)$  は既知量とする.微小パラメータ  $\epsilon$  を用いて変数 y を次のように定義する.

$$y \equiv \frac{x}{\epsilon} \tag{2}$$

微分の鎖則より

$$\frac{d}{dx} = \frac{\partial}{\partial x} \frac{dx}{dx} + \frac{\partial}{\partial y} \frac{dy}{dx}$$

$$= \frac{\partial}{\partial x} + \frac{1}{\epsilon} \frac{\partial}{\partial y}$$
(3)

まず,変位  $u^{\epsilon}(x)$  が微小パラメータ  $\epsilon$  を用いて,漸近級数として

$$u^{\epsilon}(x) = u(x, y) = u^{(0)}(x, y) + \epsilon u^{(1)}(x, y) + \epsilon^{2} u^{(2)}(x, y) + \cdots$$
(4)

と書けるとする $^{*1)}$ . ここで、 $(\bullet)^{(k)}$  は係数としてくっ付いているパラメータ  $\epsilon$  のオーダーが k 次であることを表す。式 (4) を式 (1), に代入して

$$\varepsilon^{\epsilon}(x) = \frac{\mathrm{d}u^{\epsilon}(x)}{\mathrm{d}x} = \frac{\mathrm{d}u(x,y)}{\mathrm{d}x}$$

$$= \frac{\partial u^{(0)}(x,y)}{\partial x} + \frac{1}{\epsilon} \frac{\partial u^{(0)}(x,y)}{\partial y} + \epsilon \left(\frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial x} + \frac{1}{\epsilon} \frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial y}\right) + \cdots$$

$$= \frac{1}{\epsilon} \frac{\partial u^{(0)}(x,y)}{\partial y} + \left(\frac{\partial u^{(0)}(x,y)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial y}\right) + \epsilon \left(\frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(2)}(x,y)}{\partial x}\right) + \cdots$$
(5)

 $\epsilon \to 0$  としたときに  $\epsilon^{\epsilon}(x)$  は有限値でなくてはならないので、式 (5) における  $O(\epsilon^{-1})$  の項 (最右辺第 1 項) は零である. すなわち、

$$\frac{\partial u^{(0)}(x,y)}{\partial y} = 0 \tag{6}$$

式 (6) は変数  $u^{(0)}$  が v を引数に持たないことを意味している. したがって,

$$u^{(0)} = u^{(0)}(x) \tag{7}$$

式 (6) および式 (7) を踏まえて、式 (5) 最右辺における  $\epsilon$  に関する各オーダーの項をまとめて

$$\begin{cases} \varepsilon^{(0)}(x,y) = \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial y} \\ \varepsilon^{(1)}(x,y) = \frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(2)}(x,y)}{\partial y} \\ \vdots \end{cases}$$
(8)

<sup>\*\*1)</sup>正確には  $u^{\epsilon}(x)$  の独立変数に適当なパラメータ  $\iota$  が含まれると仮定し ( $u^{\epsilon}=u^{\epsilon}(x,\iota)$ ),  $\{\varphi_n\}_{n\geq 0}=\{1,\ 1/\iota,\ 1/\iota^2,\ \cdots\}$  を漸近列とし、 $\{a_n\}_{n\geq 0}=\{u^{(0)}(x,y),\ u^{(1)}(x,y),\ u^{(2)}(x,y),\ \cdots\}$  をそれらの係数とみなして漸近展開をしたのち、 $\epsilon\equiv 1/\iota$  としたものである.

と定義する. 式(8)の表記を用いれば,式(5)は

$$\varepsilon^{\epsilon}(x) = \varepsilon^{(0)}(x, y) + \epsilon \varepsilon^{(1)}(x, y) + \cdots$$
 (9)

と書ける.次に、弾性係数  $C^{\epsilon}(x)$  も変位と同様に微小パラメータ  $\epsilon$  を用いて漸近展開できるものとして

$$C^{\epsilon}(x) = C(x, y) = C^{(0)}(x, y) + \epsilon C^{(1)}(x, y) + \epsilon^{2} C^{(2)}(x, y) + \cdots$$
 (10)

と書く. 式(9) および式(10) を式(1)2 に代入すれば

$$\sigma^{\epsilon}(x) = \left( C^{(0)}(x, y) + \epsilon C^{(1)}(x, y) + \epsilon^{2} C^{(2)}(x, y) + \cdots \right) \left( \varepsilon^{(0)}(x, y) + \epsilon \varepsilon^{(1)}(x, y) + \cdots \right)$$

$$= C^{(0)}(x, y) \varepsilon^{(0)}(x, y) + \epsilon \left( C^{(0)}(x, y) \varepsilon^{(1)}(x, y) + C^{(1)}(x, y) \varepsilon^{(0)}(x, y) \right) + \cdots$$
(11)

と書ける. 式 (11) 右辺の  $\epsilon$  に関する各オーダーの項をまとめて

$$\begin{cases}
\sigma^{(0)}(x,y) = C^{(0)}(x,y)\varepsilon^{(0)}(x,y) \\
\sigma^{(1)}(x,y) = C^{(0)}(x,y)\varepsilon^{(1)}(x,y) + C^{(1)}(x,y)\varepsilon^{(0)}(x,y) \\
\vdots
\end{cases}$$
(12)

と定義する. 式(12)の表記を用いれば,式(11)は

$$\sigma^{\epsilon}(x) = \sigma^{(0)}(x, y) + \epsilon \sigma^{(1)}(x, y) + \cdots$$
(13)

と書ける. 式(13)を式(1)3 左辺第1項に代入して

$$\frac{d\sigma^{\epsilon}(x)}{dx} = \frac{1}{\epsilon} \frac{\partial \sigma^{(0)}(x, y)}{\partial y} + \left(\frac{\partial \sigma^{(0)}(x, y)}{\partial x} + \frac{\partial \sigma^{(1)}(x, y)}{\partial y}\right) + \epsilon \left(\frac{\partial \sigma^{(1)}(x, y)}{\partial x} + \frac{\partial \sigma^{(2)}(x, y)}{\partial y}\right) + \cdots$$
(14)

さらに、外力  $f^{\epsilon}(x)$  に関してもこれまでと同様に微小パラメータ  $\epsilon$  を用いて漸近展開できるものとして

$$f^{\epsilon}(x) = f(x, y) = f^{(0)}(x, y) + \epsilon f^{(1)}(x, y) + \epsilon^2 f^{(2)}(x, y) + \cdots$$
 (15)

と書けるとする.式(14)および(15)を式(1)3に代入し、 $\epsilon$ の任意性を考慮すると、以下の式が導かれる.

$$\begin{cases} \frac{\partial \sigma^{(0)}(x,y)}{\partial y} &= 0\\ \frac{\partial \sigma^{(0)}(x,y)}{\partial x} + \frac{\partial \sigma^{(1)}(x,y)}{\partial y} + f^{(0)}(x,y) &= 0\\ \frac{\partial \sigma^{(1)}(x,y)}{\partial x} + \frac{\partial \sigma^{(2)}(x,y)}{\partial y} + f^{(1)}(x,y) &= 0\\ \vdots &\vdots \end{cases}$$

$$(16)$$

最後に,式  $(1)_4$  で表わされる境界条件は,式 (4) に従って  $u^\epsilon$  を漸近展開し,式 (7) および  $\epsilon$  の任意性を 考慮することで次のように書き換えられる.

$$\begin{cases} u^{(0)}(0) = u^{(0)}(L) = 0\\ u^{(1)}, u^{(2)}, \dots : \text{arbitrary} \end{cases}$$
 (17)

## 1.2 Multiscale Governing Equations

式  $(16)_1$  を解くためには  $\sigma^{(0)}(x,y)$  の具体形である式  $(12)_1$  が必要となり、さらに式  $(12)_1$  中の  $\varepsilon^{(0)}(x,y)$  は式  $(8)_1$  で表される.これらをまとめると、

$$\begin{cases} \varepsilon^{(0)}(x,y) = \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial y} \\ \sigma^{(0)}(x,y) = C^{(0)}(x,y)\varepsilon^{(0)}(x,y) \\ \frac{\partial \sigma^{(0)}(x,y)}{\partial y} = 0 \\ u^{(0)}(0) = u^{(0)}(L) = 0 , \quad u^{(1)}(x,y) : \text{ arbitrary} \end{cases}$$
(18)

となる. 式 (18) は  $u^{(0)}(x)$  および  $u^{(1)}(x,y)$  の 2 つ量が未知量の微分方程式となっている. また,式 (17) より境界条件は  $u^{(0)}(x)$  のみ与えられ, $u^{(1)}(x,y)$  は任意である.

一方,式  $(16)_2$  を解くためには $\sigma^{(0)}(x,y)$  の具体形である式  $(12)_1$  に加え, $\sigma^{(1)}(x,y)$  の具体形である式  $(12)_2$  が必要となる.また,式  $(12)_1$  および式  $(12)_2$  に含まれる $\varepsilon^{(0)}(x,y)$  および  $\varepsilon^{(1)}(x,y)$  の具体系はそれ ぞれ式  $(8)_1$  および式  $(8)_2$  で表わされる.これらをまとめると

$$\begin{cases}
\varepsilon^{(0)}(x,y) = \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial y} \\
\varepsilon^{(1)}(x,y) = \frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(2)}(x,y)}{\partial y} \\
\sigma^{(0)}(x,y) = C^{(0)}(x,y)\varepsilon^{(0)}(x,y) \\
\sigma^{(1)}(x,y) = C^{(0)}(x,y)\varepsilon^{(1)}(x,y) + C^{(1)}(x,y)\varepsilon^{(0)}(x,y) \\
\frac{\partial \sigma^{(0)}(x,y)}{\partial x} + \frac{\partial \sigma^{(1)}(x,y)}{\partial y} + f^{(0)}(x,y) = 0 \\
u^{(0)}(0) = u^{(0)}(L) = 0, \quad u^{(1)}(x,y), \quad u^{(2)}(x,y) : \text{ arbitrary}
\end{cases}$$

となる. 式 (19) は  $u^{(0)}(x)$ ,  $u^{(1)}(x,y)$  および  $u^{(2)}(x,y)$  の 3 つの量が未知量 $^{*2}$  の微分方程式となっている. また,式 (17) より境界条件は  $u^{(0)}(x)$  のみ与えられ, $u^{(1)}(x,y)$  および  $u^{(2)}(x,y)$  は任意である.

以上の議論を進めると、式  $(16)_3$  以降についても微分方程式の具体形を書くことはできるが、その都度高次のu が未知量として増えていく上に、それらの量に対して境界条件が付与されていないため、結局所望の解 (特殊解) を求めることはできない。そこで、次節では高次のu に対していくつかの仮定を設けることでその問題の解決を図る。

### 1.3 Assumption

もし式  $(19)_5$  において  $\frac{\partial \sigma^{(1)}(x,y)}{\partial y}$  の項を消すことができるならば,式  $(19)_5$  を解く上で式  $(19)_2$ ,および式  $(19)_4$  は不要となる.

$$\begin{cases} u^{(1)}(x,y), \ u^{(2)}(x,y) \\ C^{(0)}(x,y), \ C^{(1)}(x,y) \end{cases} : Y(x) - \text{periodic}$$
 (20)

 $f^{(0)}(x,y) = \lim_{\epsilon \to 0} f^{\epsilon}(x)$  であり、 $f^{\epsilon}(x)$  は既知量なので、 $\epsilon \to 0$  とすれば  $f^{(0)}(x,y)$  は既知量である

$$\sigma^{(1)}(x,y) = \underbrace{C^{(0)}(x,y)}_{Y(x)-\text{periodic}} \left( \underbrace{\frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial x}}_{Y(x)-\text{periodic}} + \underbrace{\frac{\partial u^{(2)}(x,y)}{\partial y}}_{Y(x)-\text{periodic}} \right) + \underbrace{C^{(1)}(x,y)}_{Y(x)-\text{periodic}} \left( \underbrace{\frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x}}_{\text{constant for } y} + \underbrace{\frac{\partial u^{(1)}(x,y)}{\partial y}}_{Y(x)-\text{periodic}} \right)$$
(21)

 $\sigma^{(1)}(x,y)$  は Y(x)-周期性を持っている. Gauss の発散定理  $\sigma^{(1)}(x,y)$  の Y(x)-周期性と  $n_{\Gamma}$  の反 Y(x)-周期性より、

$$\int_{Y(x)} \frac{\partial \sigma^{(1)}(x, y)}{\partial y} dy = \int_{\Gamma(x)} \sigma^{(1)}(x, y) n_{\Gamma} ds = 0$$
(22)

したがって、式 (20) の仮定を設ければ、領域 Y(x) で体積分することで  $\frac{\partial \sigma^{(1)}(x,y)}{\partial y}$  を消すことができる.

## 1.4 Characteristic Function

$$\frac{\partial}{\partial y} \left[ C^{(0)}(x, y) \left( \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} + \frac{\partial u^{(1)}(x, y)}{\partial y} \right) \right] = 0 \tag{23}$$

ここで、式 (23) を  $u^{(1)}(x,y)$  について解くことを考えてみる. いま、 $u^{(1)}(x,y)$  および  $C^{(0)}(x,y)$  が次式のように x のみの関数と y のみの関数の積の形で書けるとする.

$$u^{(1)}(x,y) = u_{x}(x)u_{y}(y), C^{(0)}(x,y) = C_{x}(x)C_{y}(y) (24)$$

式 (24) を式 (23) に代入して整理すると、次式が得られる.

$$-\frac{1}{u_{x}(x)}\frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} = \frac{C_{y}(y)\frac{\partial u_{y}(y)}{\partial y}}{\frac{\partial C_{y}(y)}{\partial y}}$$
(25)

式 (25) の左辺は x のみの関数、右辺は y のみの関数であるため、式 (25) が恒等的に成り立つには (左辺) = (右辺) = (x および y に依らない定数) でなくてはならない。この定数を  $\lambda$  と置けば、式 (25) より  $u_x(x)$  は

$$u_{\mathbf{x}}(x) = -\frac{1}{\lambda} \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} \tag{26}$$

と書ける. また,式(20)の仮定より, $u^{(1)}(x,y)$ はY(x)-周期性を有している. そのため, $u^{(1)}(x,y)=u_x(x)u_y(y)$ のように変数分離した場合,Y(y)はY(x)-周期関数でなくてはならない. そこで, $u_y(y)$ を適当なY(x)-周期関数 $\chi(y)$ を用いて次のように置く.

$$u_{\mathbf{v}}(y) = \lambda \chi(y)$$
 where  $\chi(y)$ :  $Y(x)$ -periodic (27)

式 (26) および式 (27) より、 $u^{(1)}(x,y)$  は次のように書ける.

$$u^{(1)}(x,y) = -\chi(y)\frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x}$$
(28)

ここで、 $\chi(y)$  は**特性関数**と呼ばれる.

$$\varepsilon^{(0)}(x,y) = \left(1 - \frac{\partial \chi(y)}{\partial y}\right) \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} \tag{29}$$

#### 1.5 Micro-scale Governing Equation

式(29)を式(18)に代入して整理すれば、ミクロ構造の支配方程式が次式のように書ける.

$$\begin{cases} \frac{\partial}{\partial y} \left( C^{(0)}(x, y) \frac{\partial \chi(y)}{\partial y} \right) = -\frac{\partial C^{(0)}(x, y)}{\partial y} \\ \chi(y), C^{(0)}(x, y) : Y(x) - \text{ periodic} \end{cases}$$
(30)

なお,式 (30) を導出するに当たり、 $\partial u^{(0)}(x)/\partial x$  の y に対する任意性 $^{*3}$  を用いていることに注意されたい、式 (30) は  $\chi(y)$  を未知量とする微分方程式である.

## 1.6 Homogenized Elastic Moduli

Hill の関係式

$$\left\langle \sigma^{(0)}(x,y)\varepsilon^{(0)}(x,y)\right\rangle = \left\langle \sigma^{(0)}(x,y)\right\rangle \left\langle \varepsilon^{(0)}(x,y)\right\rangle$$
 (31)

$$\langle \bullet \rangle = \frac{1}{v_y} \int_{Y(x)} (\bullet) dy \quad \text{where} \quad v_y = \int_{Y(x)} 1 dy$$
 (32)

式 (31) 左辺に式 (19)3 および式 (29) を代入して

$$\left\langle \sigma^{(0)}(x,y)\varepsilon^{(0)}(x,y)\right\rangle = \left\langle C^{(0)}(x,y)\left(\varepsilon^{(0)}(x,y)\right)^{2}\right\rangle$$

$$= \left\langle C^{(0)}(x,y)\left(1 - \frac{\partial\chi(y)}{\partial y}\right)^{2}\right\rangle \left(\frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x}\right)^{2}$$
(33)

式 (31) 右辺に式 (29) を代入して

$$\left\langle \sigma^{(0)}(x,y) \right\rangle \left\langle \varepsilon^{(0)}(x,y) \right\rangle = \left\langle \sigma^{(0)}(x,y) \right\rangle \left\langle 1 - \frac{\partial \chi(y)}{\partial y} \right\rangle \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} \tag{34}$$

$$\left\langle \sigma^{(0)}(x,y) \right\rangle = C^{\mathrm{H}}(x) \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x}$$
 (35)

$$C^{H}(x) = \frac{\left\langle C^{(0)}(x, y) \left( 1 - \frac{\partial \chi(y)}{\partial y} \right)^{2} \right\rangle}{\left\langle 1 - \frac{\partial \chi(y)}{\partial y} \right\rangle}$$
(36)

# 1.7 Macro-scale Governing Equation

式 (22) を考慮して式 (19)<sub>5</sub> の体積平均を取り、式 (35) を代入すれば、**マクロ構造の支配方程式**が次式のように書ける.

$$\begin{cases} \frac{\partial}{\partial x} \left( C^{H}(x) \frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x} \right) = -\left\langle f^{(0)}(x, y) \right\rangle \\ u^{(0)}(0) = u^{(0)}(L) = 0 \end{cases}$$
(37)

式 (37) は  $u^{(0)}(x)$  を未知量とする微分方程式である.

<sup>\*3)</sup>  $\frac{\partial u^{(0)}(x)}{\partial x}$  は y の関数ではないので、恒等式を成り立たせるためには y の関数の部分で等号が成り立たなくてはならない.